

平城京における長安城の影響

著者	金子 裕之
雑誌名	東アジアの都市形態と文明史
巻	21
ページ	95-105
発行年	2004-01-30
その他のタイトル	The Influence of Chang'an upon Heijo-kyo
URL	http://doi.org/10.15055/00002883

平城京における長安城の影響

金子 裕之

独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所

東アジアに位置する日本と中国との間には長い文化交流の歴史がある。そのあり方は、各時代の歴史的諸条件によって異なる。この報告では密接な関わりにあった8世紀（奈良時代）の平城京（710-784）を例に、その具体的な姿をみてみよう。古代国家は当時の超大国唐の制度である律令制を導入し、国家体制の整備を図った。その影響は様々な分野に及ぶ。平城京では都城中枢部の宮城や、園林などに唐長安の影響が明らかである。

I 三つの宮城

北闕形と周礼形の都 古代中国では天子が地上を支配する正当性を天に求めた。天と地は相似形であるが、球状の天上世界を写す地上は方形である。天子の都（王都）には北闕型と『周礼』型（あるいは回の字型）の二つの形がある。北闕形は、北天の北極星に擬した「天子南面」の原則に従って、宮城を都城の中央北寄りに配置する。唐長安城はこの型であり、平城京や長岡京（784-794）、平安京（794-1185）はこれに従う（図3、4）。

他方は、都城中央に宮城を置くもの。理想の王都として『周礼』『冬官考工記』が説く形である（図2）。ここでは9里四方の王城の各辺に3城門を開き、中央に宮殿を置き、左に廟、右に社、北に市を配置する。『周礼』は周（BC.1100?-BC.256）の書とされるが、実際の成立は漢代との説がある。近年明らかになった藤原京（694-710）は都城の中央に宮城があり（図1）、この型に近い。藤原京がこの説に則るとすると、実現の契機が課題になる。

二つの宮殿区 平城宮は9条8坊からなる平城京の中央北寄りにある。平城宮の中枢部には二つの大極殿・朝堂院の区画が並ぶ。大極殿は太極（北極）星に由来する宮城内部で最高格式の宮殿であり、即位や朝賀の儀式に用いた。朝堂院は通常、官人が朝政（政務）、朝儀（儀式）、朝参（天皇への挨拶）に用いる施設であり、中央の広場（朝庭）の東西には4棟あるいは12棟の朝堂が並ぶ。

宮城正門の朱雀門の北にあるものを第一次大極殿・朝堂院、東隣の壬生門の北にあるものを第二次大極殿・朝堂院地区と呼ぶ。この名称はもとは年代の違いを意味したが、発掘調査による解明が進んだ現在は単なる地区呼称であり、中央区、東区とする呼称もある（図5）。

両宮殿は機能と構造に違いがある。大極殿は8世紀前半に第一次地区にあり、後半には第二次地区に移動するが、朝堂は両区にあり、第一次地区には4棟が、第二次地区には12棟がある。ただしここでは上下で構造が違い、下層は掘立柱の、上層は瓦葺き礎石建の建築である。そして天皇の在所である内裏は、8世紀を通して第二次大極殿院の北にある。この宮城中枢部の形は平安宮に受け継がれ、中枢部に豊楽院と大極殿・朝堂（八省）院が並ぶ。

他方、先行する藤原宮では大極殿・朝堂院は1区画しかなく、南北の中軸線を揃えて内裏、大極殿、朝堂院が並ぶ。これがなぜ平城宮で2区画になるのか。これこそ、長安城の影響であろう。

表1 平城宮と平安宮中枢部の対比

平城宮	平安宮
第一次大極殿・朝堂院	豊楽院
第二次大極殿・朝堂院	八省院（朝堂院）

長安城の三宮城 長安城には太極宮、大明宮、興慶宮の三宮城があり(図4)、相互の位置関係から西内、東内、南内と呼ばれた。これは成立年代の違いでもある。

太極宮は太極殿がある長安城最重要の施設である。ここは隋(581-619)の大興宮を引き継いで成立し、唐(618-907)の建国初期に遡る。大明宮は太極宮の東北、長安城の東北に接する龍首原にある。ここに築いた離宮がもとで、662(龍朔2)年に大規模に拡充して蓬萊宮とし、のちに大明宮と改めた。

興慶宮は宮城の南東の隆慶坊(里)にあり、東は長安城の城壁に接する。宮城から離れるのは皇太子玄宗が居住した里坊を宮殿としたためである。714(開元2)年、玄宗即位とともに名を興慶宮に改めて拡張し、728(開元16)年1月からは日常政務もみた。

表2 平城宮と長安城の宮城の対比

平城宮	長安城
第一次大極殿・朝堂院	太極宮(西内)
第二次大極殿・朝堂院	大明宮(東内)
田村第(藤原仲麻呂邸)	興慶宮(南内、玄宗旧邸)

宮廷儀式の分化 長安城に三宮城が成立したことにより、宮廷儀式の使い分けが必要になった。太極宮では即位、朝賀や大葬(皇帝の葬儀)といった最重要の儀式葬儀を行い、その他は、大明宮で行ったようである。太極宮の重要性は玄宗が興慶宮で政務を始めた開元16年(728)以降も不変であった。宋の程大昌は、諸帝が普段は大明宮にいること、高宗・玄宗は5日ごとに太極宮に赴くとし、その理由を太極宮の格が大明宮より高いためとする(『雍録』巻3「唐宮総説」)。これを仮に権威の移動とみれば、西→東・東南となる。

含元殿と似た初期大極殿 平城宮の二つの大極殿・朝堂院地区は長安城の太極宮、大明宮を意識しているのであろう。平城宮の大極殿は第一次地区にあり、8世紀後半に第二次地区に移る。しかし、官人が政務を行う12朝堂は8世紀を通して第二次地区にあり、当初から儀式による機能分担があった。平安宮では平城宮第一次朝堂院にあたる豊楽院は饗宴が主体であり、第二次朝堂院にあたる八省院は朝儀・朝参・朝礼の場であった。このように平城宮の二宮殿で

は初めから機能の分担があった。また、大極殿が西から東に移ることは、長安城で実質的な権威が太極宮（西内）から大明宮（東内）に移ることに通じる。

さらに傍証となるのは、第一次大極殿の構造である。この大極殿は東西180m、南北360mの大極殿院の中央北よりにあり、南庭からの高さ約2・5mの壇上に建つ。大明宮の正面に聳える含元殿は高さ10mの壇上に建っており、規模は別にして姿は近い¹。

情報を伝えた遣唐使 長安城には太極宮の他に大明宮があること、その偉容や儀式のありさまなど、情報は8世紀初頭の遣唐使がもたらせたことであろう。唐の史料は、702（大宝2）年に遣唐使として渡唐した粟田真人は、大明（蓬莱）宮麟徳殿で則天武后に接見したと伝える。彼らの帰還は704年。その情報は708（和銅元）年の平城遷都の詔、710（和銅3）年の遷都に十分間に合う。

大明宮の成立は662年。なぜ、平城宮に先行する藤原宮（694-710）の構造に大明宮の構造が反映していないのか。これは、藤原京の建設計画が進行した時期の国際環境に関わる。663年、朝鮮半島南部の白村江における日本・百済と唐・新羅軍の戦争の結果、日中関係は緊張状態が続き、藤原京の基本計画は新羅国の情報をもとにした可能性が高い。これが唐長安城と藤原京の基本的な違いをもたらせたのであろう。

田村第は興慶宮に では興慶宮（南内）は何にあたるのか。これは藤原仲麻呂（恵美押勝）の田村第であろう²。藤原仲麻呂（706-764）は藤原武智麻呂の子。光明皇后の甥にあたる。皇后や孝謙天皇に重用され、女婿の大炊王（おおいおう）を皇位につける（淳仁天皇）ことで権力を掌握し、正一位太政大臣に進んだ。しかし、孝謙上皇・僧道鏡と対立して武力蜂起し、処刑された。

田村第すなわち興慶宮説の論拠は、田村第と玄宗・興慶宮の故事との類似である。まず、仲麻呂が自邸を宮城（田村宮）とみたことから検証しよう。

表3 田村第と興慶宮の対応

	田村第	興慶宮
名称	田村第→田村宮	隆慶坊 →興慶宮
居住者	大炊王→立太子	皇太子玄宗→即位
施設	東西の楼、櫓	花萼相輝楼・勤政務本楼
位置	宮城の東南部	宮城の東南部

玄宗と仲麻呂の事績の類似 田村宮の名は757（天平宝字元）年の続日本紀記事などに散見する（757・天平宝字元年5月4日、6月28日、7月2日、7月4日の各条）。

1 奈良国立文化財研究所1981『平城宮発掘調査報告XI 第一次大極殿地域の調査』

2 金子裕之1997『平城京の精神生活』角川書店、pp.50-51.

これに関わるのが、「田村第に東西楼を構えて内裏を覗き、南門を櫓とした」（777・宝亀8年9月18日条「藤原良継薨伝」）ことである。「宮繕令」では、邸宅に楼閣を構えることや宮の称号は天皇とその兄弟（親王・内親王）にのみ許されることとする。言い換えると、仲麻呂が田村第を玄宗の興慶宮に準え、田村第を「宮城」と考えた根拠となろう。

つまり、「田村宮」は即位した淳仁に関わる。しかも、即位後に居住地を「宮城」とすることは、先に述べた玄宗と興慶宮の故事にみる。

里坊位置の類似 いまひとつの傍証は、田村第と興慶宮の位置の類似である。田村第を岸俊男説は宮の南約1kmの平城京左京四条二坊に比定する。その根拠は、続日本紀の「藤原良継薨伝」が、田村第（宮）は楊梅宮の南にあるとすること。楊梅宮は平城宮東院の宮殿名であり、田村第が東院南方にあることは疑いがなく、京内におけるこの位置は興慶宮と酷似する（図3・4）。

さらに、仲麻呂が田村第に構えた東西の楼も興慶宮に関わる。興慶宮には花萼相輝楼と勤政務本楼がある。前者は興慶宮の西南隅に、後者はその南にあって両楼とも東西南北の街路に面した。成立は720（開元8）年。勤政務本楼では政務とともに饗宴を行い、玄宗と楊貴妃は両楼から民衆に応えたという。田村第東西楼の原型は花萼相輝楼と勤政務本楼であろう。

情報に精通した仲麻呂 仲麻呂は玄宗（在位712-756）の事績に詳しく、それが、彼の諸施策に「天平神護」など四字节号の採用や、常平倉・平準署の設置など、則天武后（690-704）とともに玄宗の先例に倣うものが多いことに連なる³。

玄宗に関わる情報は遣唐使から得たのであろう。遣唐使は彼の在任中に4度あり、752・天平勝宝4年閏3月の第10回遣唐使には、仲麻呂の子息（よしお刷雄）も参加した。仲麻呂は唐の最新の情報に精通する立場にあったのである。

以上のように、長安城の宮城に関する情報は逐一もたらされ、平城宮中枢部の基本構造を決めたのであろう。

II 苑池からなる園林

宮廷と園林 平城宮の内外には苑池からなる園林がある。園林は中国では苑園えんゆうと称した施設で、広大な面積に多数の園池や宮殿楼閣、亭、広場、農・果樹園、鳥獣苑などがある。宮城に必須の施設であり、その規模や数は帝国の徳を表す。漢の上林苑や南北朝期の華林園などは名高い。ここは饗宴の場であるだけでなく、農産物や鳥獣の生産、戦闘訓練の場などとして重要だった。

平城宮の園林は史料に松林苑、南苑、西池宮、宮西南池亭、楊梅宮南池がみえ、京城では越田池こしがみえる（図5）。

長安園林の模倣 松林苑から楊梅宮南池の遺構は平城宮内とその北にあり、越田池は平城宮

3 岸俊男1969『藤原仲麻呂』吉川弘文館

から約3.5kmの平城京東南隅にある。現在の五徳池がその遺構である。これら宮廷園林のあり方は、唐長安城のそれと関わる。長安城には西京（長安）三苑がある。先に述べた長安城の太極宮（西内）、大明宮（東内）、に付属した西内苑、東内苑、これらを含んで広がる広大な禁苑である。禁苑は周囲63.5km。城壁を廻らし、一郭には漢長安城跡もあった。さらに、京城の東南隅、平城京越田池（五徳池）の位置には曲江池と芙蓉苑がある。ここは唐代有数の景勝地で、唐詩にも作品が多い^{4,5}。

以下では、宮内の苑池を中心に述べよう。

二苑一池宮一池亭 松林苑、南苑はともに8世紀前半の聖武朝（在位724-749）にみえる苑である。松林苑は宮城北方にある、いわゆる後苑である。平城宮園林最大の規模であり、南北1.5km以上、東西は推定で約1.8kmである。東院地区の北にある水上池（約350m四方）は、この松林苑の園池である。南苑以下は宮内にあり、その推定規模は東西が約260m（900尺）、南北が260m（900尺）から360m（1,200尺）である。

南苑は宮東南隅の東院地区にあてる説が有力である。東院地区では8世紀末の光仁朝（在位770-781）に、楊梅宮が営まれる。楊梅宮南池はその東南隅にある「東院庭園」にあたる。現在、発掘修復して公開しており、8世紀宮廷園林の実態を知る上に重要である。

西池宮は第一次大極殿の西北に隣接する。現在の佐紀池であり、池の輪郭や中嶋跡が地形上から明らかである。宮西南池亭は宮の西南隅にある。宮の西を流れる秋篠川の古墳時代流路を再利用した施設である。

苑と池の構成 史料によると平城宮の園林は、苑と池（宮）からなる。このうち「苑」の名称は貴族の園林の嶋（山斎）に対するもので、宮廷園林の別称のようである。また、苑と池（宮）から成る構成は唐長安城の影響であろう。

長安城には西京三苑の他にも、池（宮）がある。大明宮の北半部には太液池があり、大明宮の東内苑には龍池がある。龍池は南内（興慶宮）にもあり、ここでの龍の出現が玄宗即位の予兆であった。このように、長安城の園林は苑と池からなる。

同様のことは唐太宗の事績にもみる。太宗が人々の負担となる土木工事などを行わない旨を宣言した中に、苑池がみえる。その表現は「穿池築苑」とあり、苑と池が語対である（『旧唐書』626・武徳9年9月条）。

ちなみに7世紀の飛鳥が影響を受けた百済や新羅関係の史料には、宮内に「穿池造山」（新羅本紀674・文武王14年2月条）などと池と対になるのは山であり、「苑」字がみえない。平城宮園林が苑池からなるのは、長安城の影響ではなかろうか。

南朝由来の園林名か 唐以前の伝統を内包した名称もある。平城宮の南苑や楊梅「宮南池」、

4 石田幹之助1967『増訂長安の春』平凡社東洋文庫91

5 岸俊男1988『日本古代宮都の研究』岩波書店

西池宮はもともとは中国南朝の園林に由来する固有名詞であろう。

南苑は南朝の首都、建康（南京）にある。ここには華林園、楽游苑、玄武湖など複数の園林があり、南苑は園林の一であった。その位置を『南朝宮苑記』は、台城（建康城）の南鳳台山にあるとする。何思澄「南苑逢美人」（『玉台新詠』巻6）はこの苑に題材を求めた詩文であり、他にも何遜（同巻10）などの作がある。

また、西池は奈良朝貴族の必読書であった『文選』の張平子「西京賦」（巻2）、謝叔源「遊西池」（巻22）などにみえている。

表4 「南苑」史料

年代	中国	日本
474年	宋明帝紀元徽元年（『宋書』）	
535-545年	梁武帝大同年間（『隋書』刑法志）	
561-565年	賀拔勝傳（『周書』）	
726-747年		南苑（続日本紀に記事16件）

宮南池は百済にも 楊梅宮南池は固有名詞であるが、宮号を略した「宮南池」「南池」は他にもある。南池は藤原宇合の漢詩「暮春南池に曲宴す一首および序」（懐風藻88）にみえる。小島憲之説はこの漢詩を藤原宇合邸での私宴とするが、曲宴は天子の賜宴であり、宮廷の園林でも不自然ではない。南池は、南朝史料や朝鮮半島の史料にみる。

南朝の例は沈約「古詩題六首」（『玉台新詠』巻9）にみえており、朝鮮半島では百済史料にある。『三国史記』「百済本紀」によると、漢城（ソウル）と扶余に宮南池があった。漢城では「宮南池」（447・毘有王21年）がみえる。扶余の場合は「穿池於宮南」（池を宮南に穿つ）（634・武王35年）とあり、関連記事が655（義慈王15）年2月条などにある。これは扶余王宮の南池であるから、字義の通りなら「宮南池」となって楊梅「宮南池」と類似する（表5）。南苑、南池などいずれも平城宮園林との関連が課題となる。

表5 「宮南池・南池」関連史料

	中国	百済・新羅	日本
447年		「宮南池」（漢城、百済本紀）	
510年?	「南池」（玉台新詠巻9）		
634年		「穿池於宮南」（扶余、百済本紀）	
655年		「立望海亭於王宮南」（百済本紀）	
?-737年			「南池」（藤原宇合、懐風藻88）
777年			「楊梅宮南池」（続日本紀）

農業生産か年中行事か 平城宮の苑と池（宮）は一定の規模を備え、内部には園池、導水路（後の鑿水）、橋、宮殿楼閣、亭、さらに梅林などが推定できる。『懐風藻』、『万葉集』などに

は、それらを示唆する詩文がある。平城宮ではこれらの施設は年中行事の場であった。それを示すのが関係史料の日付であり、大半が節日せいちにちに一致する。節日は季節の変わり目などに祝う日（のちの節会）のこと。1月1日（元日朝賀）、1月7日（白馬）、1月17日（大射他）、3月3日（曲水宴）、5月5日（端午・騎射）、7月7日（七夕・相撲）等がある（表6）。

節日は儀式と宴からなる。この段階では儀式が未整備との説もあるが、史料には「宴」とみえており、饗宴の場といえる。しかし、何故かこのことは宮廷園林を管理した園池司の規定にはみえない。

表6 続紀などにみる苑池の用例 数字は続日本紀史料の件数

日付	松林苑	南苑	西池宮	西南池亭
1月1日（元日）		1		
1月7日（白馬）		1		
1月17日（大射）	1	1		
3月3日（曲水宴）	2	1	1	2
5月5日（端午）	2	1		
7月7日（七夕）		1	1	
11月冬至		3		
仏教行事		1		
賜宴		2		
賜物		1		
授位	2			
その他	1	1	1	

園池司は生産主体 宮廷園林の管理は宮内省園池司が行う（「養老令」）。

「職員令」園池司条には、

「園池司

正一人。掌諸々苑池。謂。凡苑池之所育。有可以供御者。皆司其地。令不浪侵也。

種殖蔬菜樹菓 謂。草可食者。皆為蔬菜。樹菓猶菓子。其種殖二字。兼属蔬菜樹菓也。

等事。佑一人。令史一人。使部六人。直丁一人。園戸。」

これによると園池は蔬菜類の栽培場所であり、園池司の主業務は苑（園）池施設の管理と、天皇等の食膳に上る蔬菜類の栽培である。

ここには先の年中行事や饗宴のことはみえず、実際の用例と齟齬するかのようである。しかし、これまた長安との関わりで解釈すべきである。

司農寺の職掌に類似 村上嘉実説では、中国園林の機能は漢代と南北朝期では異なり、唐代園林はむしろ漢代に近い。すなわち、南朝の東晋の華林園などは光祿勳及び大鴻臚に属し饗宴などに主体をおいたが、漢代の園林は財政を司る水衡都尉に属し、唐では同様の職掌の司農寺

に属した⁶。司農寺には上林署、京・都苑總監、京・都苑四面監などがあり、長官（卿）の職掌は財政を司ることである。ここの各官司は上林署が、苑囿（園林）の園池の管理と果樹や蔬菜を栽培し、朝会祭祀に供え、京都苑總監が宮苑内の館や園池を管理し、動植物、果樹の栽培や管理にあたる規定である。

園池司の業務が苑（園）池施設の管理と、天皇等の食膳に上る蔬菜類の栽培であることは唐の制度に倣ったためであり、年中行事の規定がないのは当然といえよう。平城宮の園林は形や名称だけではなく、そのあり方も唐の影響下にあったといえよう。

今後は古代宮廷園林の構造・展開過程を詳細に跡づけるために、唐長安城園林の発掘調査が進展することが望まれる。

表7 園池司と上林署等の職務

○宮内省園池司	○司農寺上林署
掌諸々苑池	掌苑囿園池之事。(略)。凡植果樹蔬，以供朝會祭祀
種殖蔬菜樹菓等事	○司農寺苑總監
	掌宮苑内館園池之事。(略)。凡禽魚果木，皆總而司之
	○司農寺苑四面監
	掌所管面苑内宮館園池，與其種殖修葺之事

まとめ

8世紀（奈良時代）における日中の文化交流では、これまで律令という法体系の対比が主な関心事であった。ここでは首都の平城京（710-784）をとりあげ、都城の中枢部と園林にその具体的な姿をみてきた。その結果、従来注目されなかった方面にまで、強く影響力がおよぶことが明らかになった。ただし、いずれの場合も上では言及しなかったが、日本の国情に沿った取捨選択があった。このことは園池司の職務が司農寺の一部である、上林署のそれとだけ対応することからも明らかであろう。

6 村上嘉実1955「唐都長安の王室庭園」『関西学院史学』第3号、pp.47-63.

同 1974「六朝の庭園」『六朝思想史研究』平楽寺書店、pp.360-394.

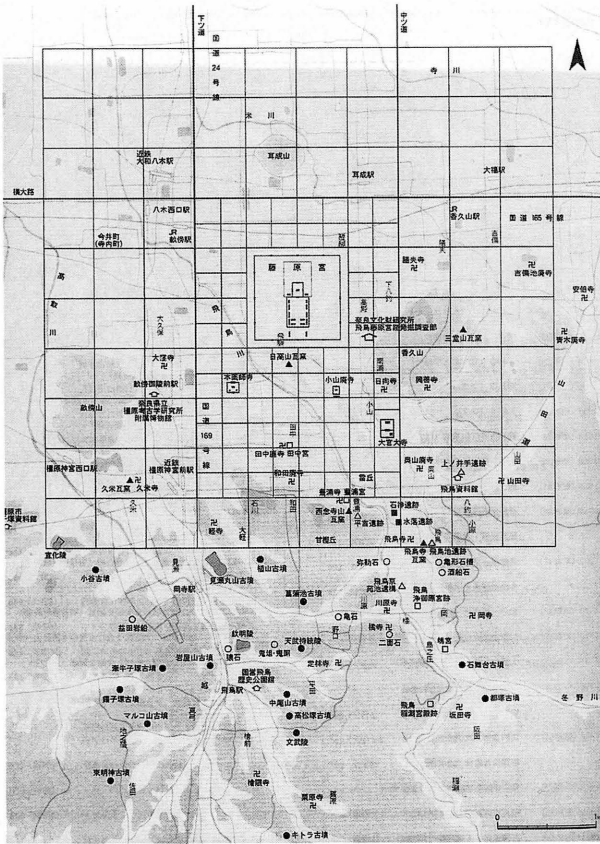
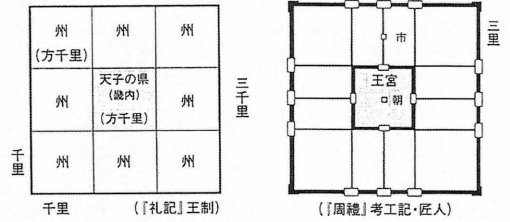


図1 藤原京の復元図 飛鳥・藤原京展図録2002による



- 1 天下・九州 (方3000里) 2 王城 (方九里) 3里 (900步)

図2 天下、九州、王城の図、渡辺信一郎2000による

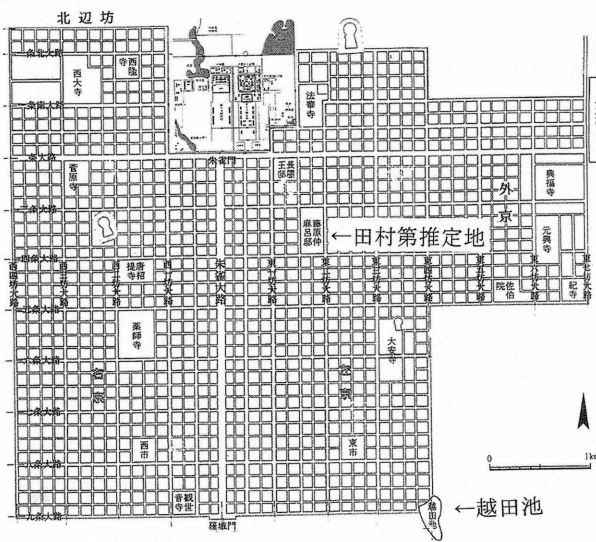


図3 平城京の復元図 日中都城図録による

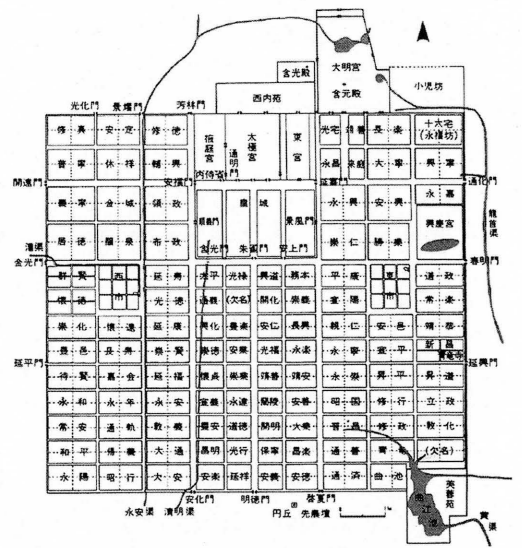


図4 長安城の復元図

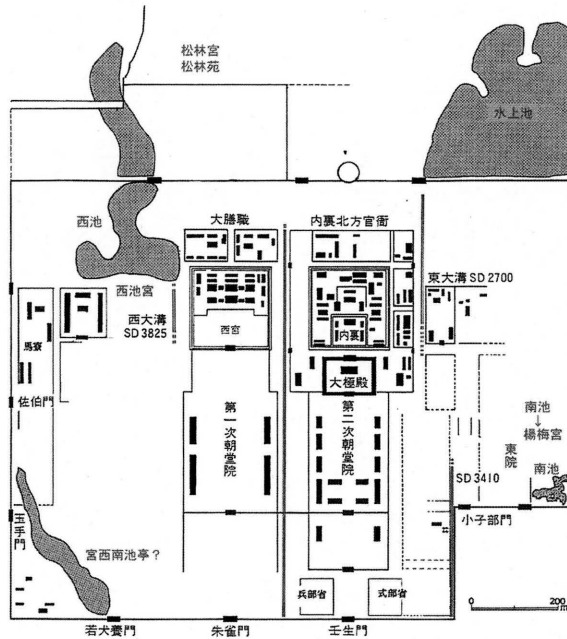


図5 平城宮の遺構配置図と園林

【要旨】

東アジアに位置する日本と中国の間には長い文化交流の歴史があり、そのあり方は、各時代の歴史的諸条件によって異なる。奈良時代（8世紀）には当時の超大国唐の制度である律令制を導入し、国家体制の整備を図った。その影響は様々な分野に及んでいる。平城京（710-784）では、長安の影響が都城中枢部の宮城や、園林などに明らかである。

三つの宮城と受容 唐の長安城には国家儀式と大礼の場として太極宮（西内）、大明宮（東内）、興慶宮（南内）がある。前二者は7世紀代に成るが、後者の興慶宮は8世紀前半に下る。7世紀代に成立した前二者は平城宮における二つの大極殿・朝堂院の原型となった。いまひとつの興慶宮は、田村第のモデルとなった（表1）。田村第は正一位太政大臣藤原仲麻呂の私邸であるが、史料には田村宮とも見える。その位置や田村第を廻る逸話は玄宗皇帝のそれを準えたものであり（表2）、長安城の3宮城は平城京に表現していた。

表1 平城宮と長安城の宮城の対比

平城宮	長安城
第一次大極殿・朝堂院	太極宮（西内）
第二次大極殿・朝堂院	大明宮（東内）
田村第（藤原仲麻呂邸）	興慶宮（南内、玄宗邸）

表2 田村第と興慶宮の対応

田村第		興慶宮	
名称	田村第→田村宮	隆慶坊	→興慶宮
居住者	大炊王→立太子	皇太子玄宗	→即位
施設	東西の楼、櫓	花萼相輝楼・勤政務本楼	
位置	宮城の東南部	宮城の東南部	

苑池からなる園林 平城宮の園林には松林苑、南苑、西池宮、宮西南池亭、楊梅宮南池などがある。園林は中国では苑圃（えんゆう）と称した施設で、広大な面積に多数の園池や宮殿楼閣、亭、広場、農・果樹園、鳥獸苑などがある。宮城に必須の施設であり、その規模や数は帝国の徳を表す。ここは饗宴の場であるとともに農産物や鳥獸の生産、狩猟、戦闘訓練の場だった。

平城宮の園林が苑池からなること、農産物（蔬菜・果樹）の栽培を主とすることなどは長安城の影響であろう。長安城の園林には宮城に付属した西内苑、東内苑、禁苑と太液池など苑と池から成る。また、農産物の栽培は、園林を管理した司農寺上林署の職掌に明記されており、日本の宮内省園池司の職掌のもとになっている。

さらに、平城宮園林の名称や故事を仔細にみると、その背後には唐以前の長い歴史が反映している可能性がある。名称では南苑や楊梅宮「南池」、西池がそうであるし、「一茎二花蓮」といった楊梅宮南池における祥瑞は、いずれも南北朝期園林の故事を思わせる。

このように平城宮の園林には中国園林の長い歴史が反映しているが、これらは唐との交流の過程でもたらされたものであろう。

【コメント】

木原 克司

金子裕之氏は、日本の都城には平城京形と藤原京形の2つの形態があり、それらを北闕形、周礼形と呼称された。金子氏が北闕形と指摘される長安城は、当時の天文思想にのっとり都城の中央北寄りに宮城を配置するものであり、日本の平城京もまさにこの形態を採用している。中国でも北闕形は唐代以降の都城の基本形態として踏襲されるが、日本も同様であり以後の難波・長岡・平安京へと継承される。一方周礼形とする藤原京の構造は、『周礼』の「冬官考工記」に記された理想の都と類似し、こうした京の出現の根拠として、『周礼』形モデルを導入したためだと一応の説明は可能である。しかし、中国の都城の歴史をながめてみても、こうした『周礼』形モデルの都城は見あたらない。中国にも実在しなかった都城形態が何故に7世紀後半の日本に採用されたのか疑問である。天智朝から天武朝にかけての7世紀後半から末の時代は、朝鮮半島における百濟・高句麗の滅亡などを契機として東アジア世界の国際関係が緊迫した時期である。遣唐使も天智8年（669）の河内鯨以降大宝元年（701）の粟田真人まで中断され、唐からの情報は入手不可能であった。しかし、この間新羅との往来は頻繁に行われてお